

編集後記

今後医療の分野にも AI が導入され、オートメーション化が進むと言われています。AI 導入により、全体的な医療水準が上がる一方でコストは下がると予測されており、産業革命並みのインパクトを医療界に与えるものと思います。AI によって医者の仕事が奪われるという言い方がされることもあります。医療を通じて社会に貢献することが医師の仕事の本質であるならば、有益なことはむしろ積極的に推進するのが我々の使命です。また現実的にこの流れに抗することは不可能であると思います。近未来の先進国都市部では、定型業務は AI に任せる度合いが高まり、やがて AI が解決できないような一筋縄ではいかない症例を扱うなど、定型化できない臨床業務や研究などが、医師の主な仕事になっていることでしょう。

このような来たるべき時代に備えて、我々は何をすべきなのでしょう。AI 時代に必要な基本的な態度は、データ共有と標準化です。当然ですが、データを誰とも共有しなければ、AI の学習に必要な情報が集まりません。一昔前は、「私の患者」「私の検体」と称して、担当医が自分の持ち物のように症例や試料を囲い込むことが希ではありませんでした。そのような態度はもはや許されません。プ

ライバシーとの問題を克服しつつも電子カルテからのリアルワールドデータが収集され、ビッグデータが医療に活用される時代はもうすぐそこまで来ています。

標準化の重要性は、例えば徒手筋力テストを考えると明らかです。徒手筋力テストには5段階の基準がありますが、検者間に（あるいは検者自身にも）大きな差があることはよく知られた事実です。また家系図の記載方法一つにしても、病歴の記載を見ていると、地図記号のような独自の記号を使用したり、全ての婚姻関係が血族婚であるような記載をしばしば目にします（家系図の書き方は、日本神経学会の HP からダウンロードできる「神経疾患の遺伝子診断ガイドライン 2009」を参照）。所見の取り方も臨床情報の記載方法も標準化されたものでなければ、情報をまとめて使用することが難しくなります。

若い先生方には、AI 時代に通用する脳神経内科医になるべく、標準的な診察方法や記載方法を身につけ、一筋縄で行かない症例の報告を書くことで、自身の経験を共有する訓練を積み重ねて頂きたいと思います。その際に「臨床神経学」を積極的に利用して頂ければ幸いです。

(西野一三)

〈編集委員〉

編集委員長 園生 雅弘 編集副委員長 高尾 昌樹
 編集委員 荒木 信夫 飯塚 高浩 池田 昭夫 亀井 聡 古賀 政利
 鈴木 匡子 坪井 義夫 西野 一三 星野 晴彦
 編集委員(幹事兼任) 小野寺 理 新野 正明 三澤 園子

「臨床神経学」 第59巻 第3号 2019年3月1日発行
 編集者 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル 一般社団法人日本神経学会
 発行者 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル 戸田 達史
 印刷所 〔郵便番号 602-8048〕京都市上京区下立売通小川東入 中西印刷株式会社

発行所 〔郵便番号 113-0034〕東京都文京区湯島二丁目 31 番 21 号 一丸ビル
 日本神経学会

郵便振替口座 東京 00120-0-12550

TEL. 03-3815-1080 FAX. 03-3815-1931

ホームページアドレス：<http://www.neurology-jp.org/>